かまくらさんだいき

鎌倉三代記

〔解　説〕

享保三年（一七一八）大坂豊竹座初演。近松半二作とも言われていますが作者は未詳。全十段の時代物で、豊臣家の滅亡を扱っていますが、時代設定、人名は鎌倉時代に置き換えられています。現在上演されるのは、ほぼ七段目のみとなっています。

〔三浦別れの段　あらすじ〕

北条時政（史実の徳川家康）の娘時姫（千姫）は、敵方の武将三浦之助（木村重成）を慕い、三浦之助の母の世話をしています。討ち死にを覚悟した三浦之助は母に別れを告げに戻るのですが、気丈な母は会おうとしません。再び出陣しようとする三浦之助を引き留める時姫、敵方である父時政を討てと時姫に迫る三浦之助。武家社会の非常に翻弄される男女、親子の姿が描かれています。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

三浦別れの段

入相(いりあい)過ぎ

されば風雅の歌人は、恋とや聞かん虫の音も、沢の蛙の声々も修羅の巷の戦ひと、身に引きしむる兜の緒、若宮口の戦場より一文字に取って返す、心はさらにおくれねど、もし落人と人や三浦が孝行の、念力通ず母の軒

「嬉しやこゝぞ」

と、気の張弓、はじめてがっくり門口に、かっぱと転(まろ)ぶ物音は、胸にこたゆる二世の縁、心時姫走り出で、見紛ふ方なき武者ぶりの

「ヤア三浦様か」

と、駈け寄って、抱き起さんも大男

「コレ時姫でござんす」

と、云へども正気あら悲しや、詮方なく間もあり合はす幸ひ気付の独参湯、注ぎかけたる薬水の一滴五臓にしみ渡り、むっくと起きて

「母人はいづくに」

「オヽお気が付いたか、なつかしや」

と、鎧にひしとすがり付く

「ムヽ思ひ寄らぬ時姫殿。こゝへはどうして、問ふ間も惜しや母人に、対面せん」

と、行くを引き止め

「時姫殿とは聞えませぬ。なんぼお嫌ひなされても、わたしはお前の女房ぢゃ、夫のかはりに母様の介抱に来たが、なんの不思議」

「ムヽすりゃこのほどより付き添ひいるか、シテ母人の御機嫌は」

「いま、すやと〳〵と御寝(ぎょし)なって」

「お食はどうぢゃ」
「アイなに差し上げても、いやとおつしゃる、けさはやう〳〵粥の湯を少しばかり」
「ハア聞きしに違はず、それでは御本復覚束ない」
「サアされどもお気の御実証なは、独参とやらの力、薬の験(しるし)は目のあたり、いまお前のお気の付いたも」
「さては母に与ふる薬で精神すゞしくなつたるも思はず知らず親の御慈悲、ハア勿体なし、〳〵。お休みならば、お寝顔なりと拝まん」
と、母もわが身もこれぞこの一世の別れと思ふにぞ、さすがの勇気も、恩愛の肉身、わけしはら〳〵と、先立つ涙案内(あない)にて、
『物音ひゞかば驚き給はん、しづかに〳〵』
と、心しづめて病所の口、立ち寄れば母の声
「嫁女々々」
「オヽ嬉しや、お目が覚めましたか、三浦様のお帰りぞや」
「義村参上仕る」
と、明くる隔てをはたとさし
「ヤレこの障子明けまい〳〵。そも三浦が帰りしとは、坂本の城へ帰りしか。よもこゝへ来る三浦ではあるまい。必ず麁相な事いふまいぞ。コレ嫁女よふ聞きゃ。夫平六兵衛殿(へいろくびょうえ)は先君の御家人。後家の身となり幼少の三浦を育てくらす中、宇治様よりたつての御所望、『頼家公の近習となし、今より二代の忠臣』とのお詞が有難さに、坂本の城中へ御奉公に参らす時、わらはも倶にとありつれども、『イヤ〳〵倅(せがれ)三浦は人に勝(すぐ)れて孝行深き者なれば、母が傍に付きそはゞまさかの時に親に引かされ、未練の心付く時は、かへって我子が弓矢の名折』と、此儘(このまま)故郷

に引残り、別るゝ時もくれ〴〵と、『必ず〳〵親ありと思ふなよ。母が事は忘れてお主に忠義怠るな。煩ふとも死ぬるともしらせもせぬぞ便もすな』と、言聞かした教訓をよもや忘れふ様がない。それにうかうか戻ってくる三浦ではない、そりゃ人違ひ、もしまた来たが定なれば、京鎌倉両家分目の大事の軍、戦場に向ひながら、さす敵にうしろを見せる、うろたへた性根ならば、子でないぞ、サ親でない。母は病ひに臥しながら、日ごとに人の取沙汰を、余の名は聞かず、わが子はいかに三浦は手柄したるかと、仏神に祈誓をかけ、おのれやれ、はやう死んで未来の夫に、わが子の自慢せんものと、今際の楽しみ心の嬉しさ。その未練な倅がありさま、なんと夫に話されう。もはやこの世で、顔合はす子は持たぬぞ。この蚊帳のうちは母が城廓、そのおくれた魂で、この城一重、破らるゝならサ破って見よ」

と、百筋千筋の理をこめて、引きかづいたる蚊帳のうち、泣く音よりほか、いらへなし。母の教訓肝に銘じ

「その御詞忘れねばこそ、故郷を出でゝ今日まで、二度便りもいたさねども、御命も危しとの噂を聞くに胸せまり、今生で御無事な御顔を、たった一目拝みたさに、眼くらんで侍の道を忘れし不調法、御病気のお気をもます、不孝を御免下されかし。いで戦場へかけ向ひ、華々しき高名して、追っ付け凱陣仕らん、その時めでたく御対面、お暇申す」

と、立ち出づる。時姫慌て抱きとめ

「コレのう、待って下さんせ。せっかく顔見た甲斐もなう、もう別るゝとは曲もない、親に背いて焦れた殿御、夫婦の固めないうちはモどうやらつんと心

が済まぬ、短い夏の一夜さに、忠義の欠くることもあるまい、これほどまでに付き慕ふわたしが心、思ひやってくれもせで、心強や」

と、緋緘（ひおどし）にうら紫の色深き

「ホヽウ切なる心は察したれども、出陣は延ばされず、夫婦となるは、凱陣の後しばしの間と相待たれよ」

「イエ〳〵それでも」

「ハテ聞きわけなし放されよ」

と、振り切り〳〵駈け出すを、また抱き止めて

「三浦様。追っ付け凱陣とは偽り、お前は今宵討死に、行かしゃんすのであらうがな」

と、云ふ声

「高し」

と、口に手を、覆へど止まらぬ涙声

「イヤ〳〵〳〵、これが泣かずにゐられうか。討死の門出には、忍びの緒を切ると聞く、ことさら兜に名香の、薫るは兼ねてのお物語、思ひ切った最期のお覚悟、わたしもお前に連れ添ふからは、何の未練に止めやせぬ〳〵、なぜ、あからさまに打明けて、『この世の縁はこれ限り、未来で夫婦になってやろ』と、一言云うては下さんせぬ、やっぱり敵の娘ぢゃと疑うてかいの聞えませぬ、父上のことは打忘れ、日本国に親といふは、奥にござる母様より、ほかにはないと思うているに、あんまり気づよい三浦様、お前を先立て、後にのめのめ生きている、時姫ぢゃと、思うてかいの」

と、身をふるはし、つもり〳〵し憂さ辛さ、鎧の膝に夕立の涙汲み出すごとくなり。

「ホヽウよい推量、いかほど親切を尽しても、三浦

が疑ひは晴れぬわやい」
「アノまだわたしに疑ひが」
「オヽ晴れぬ仔細云ひ聞かせん、ガ、それも益なしもうさらば」
「イエ〳〵待たしゃんせ」
「イヤサ放せ」
「イヤのう、コレ長う止めはせぬわいのう、どのやうに思うても、あの、おやつれなされよう、もう母様はけふあすのお命、なんぼ潔うおっしゃっても、討死と聞き給はゞ、お歎きが思ひやらるる、今宵一夜は夜伽遊ばし、同じことなら御臨終の後で死んで下さんせ」
と、云ふも泣く〳〵義村も
「父母に受けたる身体膚腑（はっぷ）、死目に逢はで別るゝか」
と、行きつ、戻りつとつ置いつ、またもや咳の声すれば
「これこそ声の聞き納め」
と、思へば弱る、うしろ髪
「せめて暫しはよそながら、万分の一の恩報じ、御薬なりとも温めん」
と、心のうちに繰る数珠の、涙忍びの自（おのずか）ら、短夜既に更け渡る。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。